

- 神 楽 名 栗の尾神楽
- 伝 承 地 栗の尾地区
椎葉村大字松尾栗の尾
- 指 定 等 国指定重要無形民俗文化財
- 伝承団体 栗の尾神楽保存会
代表 中竹直人



扇の手

□神楽の概要・由来・その他

栗の尾地区は椎葉村の北東部、旧西郷村と接する世帯数11戸の集落である。五穀豊穰と住民の健康を願い、氏神様である天満宮、森鹿倉大明神、稻荷大明神の三社に神楽を奉納している。神楽前日に、各神社の本殿付近に複数の小さな祠を設え、当日には御神酒を注いだ竹筒のカケグリ、御幣、御供等をそれらの祠にお供えする。注連を張り、御幣を吊し、神事を行った後に、神事的要素の強い「式三番」と称される三演目を、それぞれの神社拝殿にて奉納する。

栗の尾神楽は高千穂から伝わったとも云われるが、いつ、どのように伝わったかは不明である。栗の尾営農センターが建設される以前は、民家を神楽宿とし夜神楽が行われ、シバ小屋と称される御神屋が、神楽宿の庭に張り出して仮設された。御神屋中央に龍図の描かれた四角の天蓋を吊し、御神屋周りにはザンセツと呼ばれる四季の景色や鳥居などの図柄の切紙の飾りを下げ、祭壇の高天原には複数の面が飾られた。外神屋の壁に大きな竹を一本とおし、見学者たちがその竹を押す「神楽ぜき」が掛け声と共に行われた。当時は夜店なども出て、見学者も多く賑やかであったと云う。

□芸能の機会・場所

- 栗の尾神楽：11月第4土曜日 12時頃から天満宮、森鹿倉大明神、稻荷大明神、栗の尾営農センターの各所にて「式三番」を奉納

□演目一覧

平成 26 年 11 月に奉納された「式三番」

扇の手 鞆の手 宮神楽

平成 15 年度に奉納された演目

舞い入れ	扇の手	さやの手	宮神楽	おがみ上げ
ましばり面	たる舞い	ろく 六らい	矢の手	たすきの手
てのお	ふり上げ	綱入れ（へび）	しめぐち	おきえ
しば引き面	弓の正護の元	弓の正護	めご舞	

□演目の特徴

夜神楽の「舞い入れ」では、左右と中央の三方に面が連なる面をつけた「^{さんぼうこうじん}三宝荒神」が登場する。御幣を吊り下げた榊木を背負い、天冠を頭に着け、右手に扇を左手に杖（面棒）を持ち、太鼓、笛、^{かね}鉦の奏樂のなか御神屋へと向かう。御神屋の前に立ち止まり、杖の云われなどの言い句（^{しょうぎょう}唱教）を述べた後、荒神の杖を神主に譲り渡す。神主は別の杖を三宝荒神に渡し、御神屋内に招き入れ、共に舞う。三宝荒神は「芝の句」でも小荒神とともに登場し、問答がなされたと伝えられる。

昭和三十八年の神楽次第によると、記紀神話の^{あまのいわと}天岩戸開きにちなんだ演目「しばひき」「いせのじんぎ」「たちから」「ととり」「大神宮」が奉納されたと記されている。「ととり」では板を持ち上げて岩戸を開き、「大神宮」では「めしょう面」が岩の陰から現われ、両手に日・月を持ち静かに舞ったと云われる。

□その他の特徴

- 面： 三宝荒神、鬼神、柴引き、戸隠、めぐ面、ましばり面、稲荷面、めしょう面、荒神 等
- 楽： 太鼓、笛、^{かね}鉦（銅拍子）。神社に隊列をなして向かう際にホラ貝が吹かれる。
- 装束：^{まいぎぬ}舞衣、^{えぼし}袴、烏帽子 等
- 採り物： 御幣、^{めんぼう}面棒（杖）、扇、鈴、刀 等
- 文書： 明治三十六年に天明四年の本を写したと記される「みかうや高天原」他、唱教や生活に関する資料が数多く保管されている。

□伝承の現状・課題

昔は50名ほどいた^{ほうりこ}祝子は9名となり、夜神楽を行うことが厳しくなっている。現在は、「式三番」を奉納する集落だけでの^ひ日神楽となっているが、面の多様さや保管されている複数の文書などから、かつての賑わいが覗える。「式三番」以外の演目も伝承されているが、高齢化や舞い手の不足などで継承が難しくなっている。



扇の手



鞘の手



宮神楽